特別講演 2

疾病構造の変遷とその背景
ー流行と不易とー

名古屋大学　青木　國雄

地域や特殊な人間集団での疾病構造は、病因、環境要因、宿主要因の相互作用により規定され、医療や予防対策によりかなりに修飾される。病因には、感染症における細菌やウイルスのような生物学的因子、電離放射線、熱、寒冷、暴力などの物理学的因子、ガス、粉塵、毒物などの化学的因子、ストレス、行動傾向などの精神心理的因子がある。環境要因は、地勢、気候、土壌などの自然条件、都市、農村、産業、労働環境、交通などの居住空間、上下水、食品、住居、生活必需品などの環境衛生、また宿主要因には、性、年齢、民族、遺伝などの生物学的マーカーや人口要因のほか、養育条件、教育、生活習慣、行動傾向、労働条件、収入、文化的背景などが含まれる。これに予防対策や医療のレベル、その普及度などが介入して疾病パターンに影響し、自然災害、人工災害が一時的に病の動向を変更する。これらの諸要因は時間と共に変化するものであり、従って、疾病の頻度分布、疾病構造は時代と共に変化し続けてゆく。

ここでは、わが国の過去一世紀に及ぶ死亡率の変動、疾病パターンの変遷を展望し、その特性、動向、規則性を明らかにし、とくに時間的変化と関連する諸要因の質と量を検討する。これを世界各国の動向と比較する。結核のように長期にわたり流行した病や、近年急増している癌死亡などは、変動の規則性や将来動向について疫学的に論議する。また変動の小さい病でもその時間的な質的変化を指摘し、外的要因との関連を考察する。各出生年代グループでは、その発育期における環境要因の影響が生涯に亘って強く残るので、時間の経過につれて、地域全体の疾病像を変化させてゆく。こうした現実を基礎として、今後 20 年間の死因別死亡率の動向を統計学的に推計し、わが国の死亡動向を予測すると共に、今後の問題点にふれたい。なお、交通事故については、過去 20-30 年間の動向から、今後 20 年間を予測し、死亡構造の変化から若干のコメントを付したい。

1．　わが国過去百年間の死亡率の変遷
　a.　死因別死亡状況の変化
　b.　年齢別死亡率の変化、出生年代別（出生コウホート別）特性
　c.　世界各国における死因別死亡構成の変化の動向、日系米人での経験
2．　過去一世紀のわが国の病因、環境要因の変化
3．　宿主要因。　臓器、組織での疾病感受性の変化
4．　今後 20 年間の死因別死亡状況の予測

地域の疾病構造は、それぞれの居住空間での長い歴史や伝統により強く規定されていたので、その時間的変化は極めてゆるやかなものであった。しかし、近年のすさまじい基礎科学研究の変革とその実際的な技術の進歩は社会、経済環境ばかりでなく、人の生活そのものを著しく改変させ、そのスピードに平行して、病因、環境、宿主各要因が変化して、疾病構造を甚だしく変貌させてしまった。最近の情報化はさらにこの傾向を加速化しているようである。これまでの対応は常に後追いであり、救われるべき犠牲者をそのままにしていたが、これは改善する必要がある。前述した様に、こうした変化は過去の事態の分析や、将来予測により、かなりに解明できまた予防できる部分が小さくないからである。過去の経験が貴重な教訓を取り出し、今後の対策の資とするのは常にルーチンにせねばならぬ研究、調査であろう。交通事故死については専門の先生方のご努力を多とするものであるが、やはり時代と共に変貌してゆくものであり、その方向を誤りなく把握する必要がある。一言加えたいのは、世界先進国の中で英国のみが一段と交通事故による死亡率が低い、とくに若年者が低率なことは、他山の石とすべきではなかろうか。ちなみに 50 才までの死亡率は日本より英国の方が低率であり、それは交通事故死の差といわれているからである。